

大山 FS 相談会報告

タイトル

都市—農村のバイオマス循環システムの構築にむけた実践研究

—都市衛生の改善と生業基盤の修復にむけて—

日時：2022年8月3日（水）13時15分から15時15分

形態：オンライン

参加者：嘉田由紀子・前滋賀県知事、参議院議員

古川彰・関西学院大学名誉教授（環境社会学）

大山修一・プロジェクトリーダー

土屋雄一郎・プロジェクトメンバー

国枝美佳・プロジェクトメンバー

原将也・プロジェクトメンバー

中尾世治・プロジェクトメンバー

鈴木香奈子・プロジェクトメンバー

松田素二・プログラムディレクター

冒頭に資料に基づいて30分程度、プロジェクトリーダーからプロジェクトの目的や位置付け、それに目下の懸案事項などについて概括的説明があった。

都市の有機ゴミをこれまでの「燃焼処理」型から「循環型」に転換させることによって、社会や個人の存在基盤の不安定化を改善する可能性を探るというプロジェクトの目的を明らかにし、そのために、飢餓とテロ（紛争）によって不安定化が進行するニジェールにおける、都市住民と農民、牧畜民の相互関係の再構築経験を説明した。都市民が出した有機ゴミを乾燥地帯に移送し埋め込むことを継続する中で、都市のゴミ問題、農民と牧畜民の対立の回避から共生関係の確立、砂漠の緑化に至るまで様々な効果を生み出していった経験を軸に、物質循環に価値を置く社会と文化の再創造の意義を明らかにした。

これに対して、嘉田さんの方からまず下記のコメントがあった。

第一は、日本では都市のし尿を農村に回して肥料にする形で循環を図る文化が各地で江戸期には成立していた。こうした循環型の文化を日本社会が歴史的に築いてきたことを下敷きに、この現代における都市—農村物質循環システムの構築を位置付ける必要があること。第二は、例えばし尿を肥料にするというようなことは、マラウイ湖畔の社会では到底受け入れがたい文化的異物であった。つまり物質循環には常に文化からの抵抗、文化との対話が必要になる。この点への着目と考察が十分ではないのではないか。例えばし尿についても、日常生活からそれを忌避する文化と、親和的な文化は明確に区別される。その中で忌避文化の中に、し尿循環を持ち込むためには、単に正しい科学的知識の啓発や、上からの

強制では機能しない。そこに新しい価値観の創造が必要なのである。

さらに、日本における循環型を進めている自治体については、かつて実施していたところも、合併などで広域行政となると、燃焼型処理に移行してしまう傾向が強いこと、都市部における循環型の再生は環境問題の核心だが、現実の政治の中では、それが票に結びつかない場合もあり、政治の決断ができないこともあるという指摘があった。

調査サイトの選定については、メガシティは最終目標に残しておいて、当面は、リモート地域と都市の中間にある地域社会における物質循環型の試みや意義に焦点をあてたほうが実際的ではないかという助言もあった。

続いて古川さんからは、まず2点の質問とコメントがなされた。

一つは、循環型システムは、かつて日本の江戸期だけではなく、世界各地で社会に埋め込まれていた。例えばネパールのカトマンズに伝統的に存在した各住居前のゴミ捨て穴（ガ）も、衛生上の問題や、交通上の問題などで、国連や援助団体からの助言を受けて消失して行った。それまではそこで捨てられたゴミは特定のカーストの人によって集められ、循環していたが、それが切断されたのである。それが現在、環境フレンドリーな生活が賞揚され再生・復活しつつある。つまり、もともと共同体に埋め込まれていた循環システムが、近代化のなかで切断され、今日、再生されつつあるのだが、問題は、再生するための思想や価値観（科学的正しさ、グローバルな正しさなどの）を問う必要があり、それは必ずしも単一ではない。生ゴミ再生のためにネパールでもどこでもコンポストを配布することが広く行われているが、その地域で暮らす人々の文化（価値観）から乖離して機能していないことが多い。従って、循環、切断、再生のメカニズムの多様性と歴史性、文化性を捉える必要がある。

もう一つは、都市農村物質循環システムは、単一のシステムではなく、ミクローメゾマクロなレベルまで多様で相互に入れ子上になった複雑な体系を構成している。従って、単純に、切断から再生へと平板に語ることはできないのではないか。